

村野次郎創刊

# 香蘭

二〇二五年(令和七年)七月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇二卷第七号

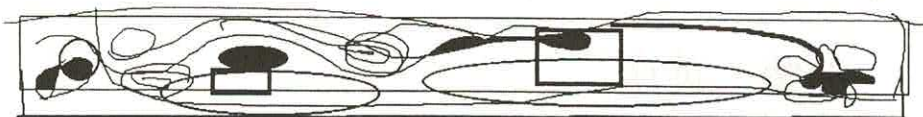


2025年(令和7年)7月号

第102卷

第7号

通卷1135号



# 香 蘭

2025年(令和7年)7月号  
第102巻 第7号 通巻1135号

## 目 次

|                    |       |    |
|--------------------|-------|----|
| 村野次郎作品 私の愛誦歌(1119) | 佐伯 弥生 | 表二 |
| 招待作品 奇数月連載① 溶ける魚   | 加藤 英彦 | 2  |
| 作 品                |       |    |
| 一                  |       | 4  |
| 二                  |       | 23 |
| 三                  |       | 29 |

### 推薦香蘭集

### 香 蘭 集

|     |                 |    |
|-----|-----------------|----|
| 作品一 | 十首選(五月号) 高畠 憲子選 | 14 |
|-----|-----------------|----|

|       |                 |    |
|-------|-----------------|----|
| 作品二・三 | 十首選(五月号) 丸山三枝子選 | 16 |
|-------|-----------------|----|

|                           |        |    |
|---------------------------|--------|----|
| 村野次郎への旅(183) 昭和期の「香蘭」(十八) | 千々和 久幸 | 18 |
|---------------------------|--------|----|

|                   |        |    |
|-------------------|--------|----|
| 続・酔風船(19) 負の能力(二) | 千々和 久幸 | 21 |
|-------------------|--------|----|

|                          |       |    |
|--------------------------|-------|----|
| 一頁公論(50) もう一度訪ねたい場所——上高地 | 藤田 祐恵 | 22 |
|--------------------------|-------|----|

|           |  |  |
|-----------|--|--|
| エッセイ・自由研究 |  |  |
|-----------|--|--|

### USスチール買収阻止に思うこと(その1)

|                    |       |    |
|--------------------|-------|----|
| 焦 点(五月号) 伸縮する時間を詠む | 犬山 俊昭 | 41 |
|--------------------|-------|----|

|            |                |    |
|------------|----------------|----|
| 作 品 評(五月号) |                |    |
| 作品一        | 渡 辺 礼比子        | 44 |
| 作品二        | 八木橋 洋子         | 46 |
| 作品三        | 阿 部 容子         | 48 |
| 香蘭集        | 石川 詔子          | 50 |
|            | 田 村 久美         | 52 |
|            | 白井・富田・菊地(篤)・大塚 | 54 |

### 七 首 抄(五月号)

### 緑 地 帯

### 明宝研究会第一六三回 四月例会 永福門院作品研究

### 他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向

### 歌会及び会合・会員消息・他

### 編集後記・新宿日記

### 表紙絵

### 山口 蓬春「桔梗」

### 目次・緑地帯カット

### 和 田 和 雄

表紙絵

山口 蓬春「桔梗」

目次・緑地帯カット

和 田 和 雄

76・表三

72

66

58

56

54

52

50

48

46

44

41

22

21

18

16

14

36

35

29

23

4

2

2

うすうすと海底に月はさしぬめり

現世の船は海をすべるも

『夕あかり』

北原白秋主宰「地上巡礼」第二号（大正三年発行）に発表され、「潜光」と題された一首である。「うすうすと」「さしぬめり」「すべるも」という淡々とした言葉の響きが幻想的な情景となり、心にゆっくり入ってくる。

年譜によれば同年父を四十九歳で亡くしている。父を亡くした二十歳の青年・村野次郎は夜の海をどのような思いで見つめていたのだろうか。

掲載歌は「現世の船」という表現をしたことで、異世界としての海底が立ち上がってくる。見えるはずのない海底は、あらゆるものを呑み込んで、深く暗くたゆとうている。そこにうすうすと月の光がさしているのであらう、と青年は想像する。たまらなく寂しい情景であり、心が安らぐ情景でもある。

現世の船は、留まることのない時の流れとも読める。すべるように進む現世の船に、漠とした不安も伝わってくる歌である。

溶ける魚

詫びてすむ一生ならば晒されて<sup>なぶ</sup>嫩られてよし骨のばらばら

朝がたの夢より抜けていちまいの皮だけとなり風にふかれる

あれはいつの私であるか錐もみに空切りながら墜ちてゆく影

走りぬけよという声がする耳もとで風さわぐもう足がうごかぬ

おめおめと生きうるならば頭<sup>ず</sup>をたれて礼<sup>い</sup>せよ矜羯羅、制多迦のまえ

すこし圧されてわが胸を刺すいっぽんの鉤<sup>はし</sup>ありぴくりと動くともなく

風ふくたび雨ふるたびに吊るされて汚れたままの丸首のシャツ

身のうちに跳ねる一尾を飼いいしが今では溶けて目のみをのこす

まだいのちあるなら歳月のむこう詫びねばならぬ幾人かいる

戦いのすんだ暮れぎわ草むらに墓碑とも呼べぬ石ひとつ積む

宇宙の大きさは少なくみても138億光年を超えるという。それが今も膨張を続けている。無際限にひろがる欲望のようなこの果てしなさはわたしの想像を超える。意思も目的もなく膨らみ続ける宇宙からみれば、人間の一生など知ったことではないだろう。地球が芥子粒ほどの微小な存在であれば、そこに住む人間など無限小の一粒子ですらない。そのむこうに神を見ようが何をみようが、宇宙は静かに膨張を続けるだろう。節操がないのは無際限に広がる宇宙ではなく、分も弁えずに余計なことまで知ろうとする人間の貪欲さではなかったか。黙って生を終える虫たちのほうが天の摂理を弁えているかも知れぬ。

かつて竹取の翁が仰いだ月のあかりや、沖のむこうに妣の国をみた古代の視座をわたしは愛する。望遠鏡でガリレオが太陽の黒点など発見しなければ、幻想は今もわたしたちの姿に花ひらいたのではないか。尽きせぬ近代科学の恩恵に浴しながら、不遜を承知でそんなことを思う。最近、NASAの打ち上げた宇宙望遠鏡は130億年前の宇宙の初期銀河を観測したという。

翻ってわたしの日常はどうだろう。わずか

ばかりの書架と一合の米と二酌の酒があればよい。朝がた睡りについて数時間後に目が覚めてまた酒を酌む。天空の歳月を思えば七十年の月日など一瞬ですらないだろう。それでも紙魚のように消せない一点がある。ふり向けば、わたしは幾人のひとを傷つけて来たのか。今ならわかる。彼女たちこそ真つ当なのに、わたしの愚かさはまずわたし自身の手で告発されなければならない。

人類の歩みは殺戮の歴史であった。それは今も変わらないし、これからも繰り返されるだろう。一人の死は悲劇だが百万人の死は統計上の数字に過ぎないと嘯いた男は、たった一人の死の哀しみすら理解していなかった。おそらく、生きるとは誰かを傷つけることなのだ。それはその一人の死を自らのうちに重くひき受けることである。だれも傷つけないで生きることが不可能なのであれば、いっそ生きることをやめればよいではないかという声がある。

わたしは今酔っている。幾人かの誠実さを裏切った罪は膨張する宇宙の極小の点であれ消えることはない。その星がひかりを返さなくなっても空からずっとこちらを見ている。

## 四 選 者 の 作 品

虚ろなり

平塚 千々和 久 幸

どの顔も屈託のなし転任を祝える会に招かれて飲む

あ、虹とわが叫びしが間無く消え街はしずかな春雨となる  
ジブラルタル海峡いきみ思い風寒き弥生のカレンダー剥ぐ  
信号が変わればたちまち娘らの脚がひかりを曳きて先行く  
代官町なぎさ通りの眼科医のプラントーにはすみれが咲いて  
衰えてゆくときわれの本心が曝されいたり 嘆かうなかれ  
悲劇より喜劇を多く演じ来しわれと思うも さくら散りゆく  
妻死して何か変わるただ呆と虚ろなるまま過ぎて来にしを

ドイトワイン

我孫子 丸 山 三枝子

弱り目に祟り目のような日が暮れて疲れ目に点すスマイル 40

身過ぎ世過ぎが見過ぎ世過ぎと誤植され見過ごしならぬ君の歌集に  
摘みきたる菜の花たんぽぽ挿して置くランチに集う子ら待つ卓に  
梢よりこずえにわたす伝言のあるかつぎつぎ移りゆく鳥  
さみどりの木々はたちまち深緑になりて来て鳴く赤翡翠よ  
ひらひらと花から花へわたりゆく蝶あるときはわたしの敵

これの世に立ち寄り我の身を巡りやがて死にゆくアオスジアゲハ  
ドイトワイン仄かに洩く草まくら旅の終わりに飲みし日ありき

今日よりも

東京 桜井 京子

佐保姫が行つたり来たりをくりかへし桜咲き満つうらうらの春  
校正を終はらせんとて起きてゐる夜更けひそかに降る春のあめ  
昼間見しハクモクレンに夜もふる黄砂ならむか思ひて眠る  
今日よりも明日が良くなる なんてもう信じてをらずまた春が来る  
狂ふほど誰かを愛したことはなし永久に執念し電波時計は  
ネットにて買へる気がするチケットの冥府はいまだ見学できず  
物陰に刃物の音をたててをる山姥だつたか此処の歯科医師  
あんなにも次つぎ斬つて成敗し桃太郎侍にためらひはなし

君 影 草

横浜 渡 辺 礼比子

陽を浴むる大島桜の樹下<sup>こした</sup>ゆくおさなも老いも透き通りたり  
少年の君と渡しし沈下橋 菜の花畑が遠く見えいき

空町のウルトラマンショー見にゆける子ら戻り来ず夕飯時を  
航空を守ると聞けば訪るる穴守稲荷 子ら発たしめて

癌もてど百まで生きるかもしれず夫<sup>つま</sup>より別れをかなしむなかれ  
ヘアサロン（ローズ）の朝のミーティング赤青金髪額<sup>ぬか</sup>を寄せあう  
医院減りバス減り物価高騰す 君影草の香に立つ春を  
丘べよりヒノキ花粉の海へ飛ぶ経路なりとぞわが町むつうら



込みます、お母さん」という最期の叫びを聞かされる、という事態は想像したくない。令和の今、戦争がいつ始まってもよい空気が身辺に迫る。来るかもしれないのではなく、来てはならじ、と切に願う。

たのだろうが、ふつう右手というと、(右手が利き手として) かけがえのない大事なものを指す時にも使う。きつと愛用の手袋であったに違いない。おかえり、にも心情がよく出ている。

・香蘭よ蘭のごとくに咲き盛れ若人集い弥栄にあれ

森田 徹

柏原 陽子

夫が通わねばならない病院の行き先。徐々に増えたのであろうそれらを淡々と並べ、畳みかける。その裏には、世話をする妻としての矜持が見える。それは夫への愛の裏返しでもあろう。下句、比喩や管理す、といった生硬な言葉に、かえってシャイな妻の気持が出ている。よき世話女房なのだろう。世話をする側にいられる幸。

・この人が頑張ってるから頑張ろう課長はそんな存在だった

松沢みどり

実に素直に思いが詠まれているなあ、と一読、好感を持った。この「課長」のところに、読者は様々な身の周りの人物を当てはめてみたくなる。職場の人びと、身内の誰彼、先輩後輩たち等々、普遍性のある歌である。日常、このような思いは誰にもあるが、案外、歌にはしない。そこが、逆に新鮮に思える。詠まれてみて、そうかと気づく心の盲点のような歌だ。

・失くしたと思いいし手袋道端に見つけて拾う「おかえり右手」

宮口 弘美

四句までは、日常よくある経験であるが、結句によって一首が光を帯び、立ち上がってくる。「」であるから、失くした手袋を拾った際、思わず発した言葉であらう。まるで、失くした自分の右手が落ちていたかのようで、インパクトがある。実際に右側の手袋であつ

卒寿にして二つの大病を克服。特に、入院、手術でやむを得ずに休詠された時は、香蘭読者とともに、その身を案じていた。しかしこの度、五月号に復帰され、安堵。その第一声のような一首に出会い、「言霊」ということを強く思った。結社に若人が集う、という場面が困難になつてきてはいるが、(気持ちの若い人は居るが) 諦めるには早い。万葉の時代から長く続いてきたこの詩型がすぐに廃れるはずがない。また、百年を超えて繋がって来た「香蘭」の灯を何とか、ともし継ぎたい。大いなる困難を乗り越えた作者の心意気を、人生の後輩である私達はおろそかにできない。

・遅々として「漱石全集」読み泥み明治の亡母の言葉と出会う

山中 光枝

漱石の文章を懐かしく思い出す。筆者はそう沢山読んだわけではない。だが、有名な「坊ちゃん」「吾輩は猫である」からも、無鉄砲、剣呑、妻君、車屋、へつつい、胴霊、明治に生きた作家らしい言葉が浮かぶ。読み泥む時は、辞書を引いたり脚注を見たものだ。明治生まれの祖母や、夫の祖父母達と多少交流があった筆者は、この作品の言わんとするところがわかる。歌意が万人に理解される歌ではないが、昔の小説中、亡き親の使っていた言葉に出会ったという発見は心温まる。その気づきを詠んだところに新鮮さを感じた。

# 作品二、三 十首選



(五月号作品から)

丸山 三枝子 選

## 〈作品二〉

・満足に食事摂れない人のいる国に溢れる大食い番組

小笹岐美子

近年益々格差社会化してきた日本、デパートやスーパーには物が溢れ、物に群がる人々も溢れている。その一方で、三度の食事も満足に摂れない暮らしをしている人々もいる。テレビの「大食い番組」を見て、作者はその環境下にいる人々に思いを巡らす。この番組を面白おかしく見て終わるのではない、作者の貧困層への視線のあたたかさが思われる。大食いを競う番組の品格も疑いたくなったのではあるまいか。

・かすかなる去年の落葉の声を聞く裏の山路を風わたるとき

澤田久美子

いま樹木から離れて散ってゆく落葉ではなく、「去年の落葉」だから、地面に折り重なって積もっていた枯れた「落葉の声」を聞いている、と言う。枯れ落葉のかすかな声は、作者にだけ聞こえてくるのだろう。裏山を吹き渡る風の音を聞いている作者にだけ聞こえてくる感覚的な「落葉の声」からは、とても静謐な時間が偲ばれる。作者の視線はどちらかと言えば、人間よりも自然の方に向けられて

いる。それは、見えているものや聞こえてくるものの背後に潜む、幽かな気配のようなものを捉える。

・檸檬色蜜柑色から橙色 赤い柑橘そのうち生まれん

篠永 路子

果物、殊にも柑橘類から採った色の名前は多い。作者はそのことを逆手に取って下句で、少しずらした、茶化した視点から見て面白がっているようだ。ウィットのと歌とでも言おうか。《パステルカラー》のタイトル連作六首の中の一首なのだが、《パステルの淡い色たち仲良しで何を描いてもパステルカラー》の、擬人化のユーモラスな歌もある。ここ数年、一つの題材に絞った連作を愉しんで物している作者ではある。

・一番に言いたいことは我慢して短歌はふふふミステリアスだ

馬場 美信

一読、思わず「ふふふ」と吹き出してしまった。愉しんで短歌を詠んでいる作者が浮かぶ。嘗て作者と、「短歌」の自己抑制のことにについて語り合ったことを思い出した。思いのままを言わず抑制して、その背後に広がるミステリアスな空間を膨らます。答えを出さないと暗示したい。そのことを充分に心得て答えを出さず、下句のフレーズのごとく軽妙に詠み作歌を愉しんでいる。漸く病を克服して元氣を取り戻した作者が浮かぶ。

・父の死の八十二歳をひとつ越え父は若死にだったと思う

藤本佐知子

人生百年時代と言われる昨今、八十二歳で他界した父は若死にだった、とつくづく思う作者。2025年の日本人の平均寿命は男性81・

09歳、女性89・44歳であると言う。八十三歳になった作者は自らの年を顧みて、父の時代と比べて父の若死にを惜しんでいるのだ。ふた昔ほど前ならば、自分も「死」を身近に意識していたかも知れない、とも。若死にはまだまだ御免被りたい。

・ 駅までの徒歩十分が遠出なる夫を誘いて暖かな日は

三澤 幸子

駅までの徒歩十分が、「夫」ととっては遠出なのだという。病を託す身であるかも知れない。上句の端的な措辞で、老年の作者夫婦の散歩コースが手にとるように見えてくる。この上句を受ける下句の措辞で、作者の夫への濃やかなころ配りや日常が想像される。さり気ない、それでいて読む者の心に真っ直ぐに響いてくる表現は、容易なようで難しいといつも思うのだが作者は背伸びをせず、身の巡りを平らかに見つめ淡々と掬い上げてくる。

・ 骨壺はいがいに重く墓までをわが両の手に何かもの言う

安田 恵子

4月号の近詠十五首は、「主人の挽歌（からっぽの心）」であった。そのひと言随想に、「…今では短歌は私の希望のひとつでもある。額の中の夫が何か言いたそうな顔で笑っている」と記している。掲出歌はそのご主人の納骨の日の一場面であろう。骨壺が意外に重く感じられたのは死の悲しみの重さだろうか。骨太の健全な体質の人であったとも考えられる。下句の迫ってくるような表現に注目した。亡き人は作者に何か言いたいことがあったのかも知れない。

〈作品三〉

・ マンションに豆撒ぎの気配とんと無くわが家以外は鬼は来ぬらし

内海 恭子

「鬼は外、福は内」と節分の追儺をやっている家が少なくなった気がする。ましてマンションでは尚更聞かなくなつた。作者の家ではきちんと豆撒ぎをしたのだ。「豆撒ぎの気配とんと無く」の親しみ深い語調に実感が隠り、下句の、鬼を主格に詠んだユーモラスなフレーズに立ち止まった。「鬼は外、福は内」の、何とも単純で分かり易い文言はネットで見ると、日本の唱歌の一部分とあつた。

・ 玄関に紙雛飾り水仙と菜の花活けて春です春です

大塚美智子

三月三日は雛祭り。玄関に飾られた「紙雛」は作者の手になるものか、或いはもつとゴージャスな「紙雛」かも知れない。玄関だから、二人の内裏雛でもあろうか。花好きの作者らしく桃の花ならぬ、季節の花の水仙と菜の花をスッキリと飾り、春の訪れの桃の節句を愉しんでいる。結句の口語調の「春です春です」がその気分を盛り上げている。

・ ひとつずつ出来ないことを数えては母の介護度ひとつ上がりぬ

佐伯 弥生

年をとるごとに、ひとつずつ出来ないことが増えてゆく。誰にも覚えのある、悔しくも切ない一つ一つを具体的に口に出して数えあげている母か。口に出して言うことで、自身を納得させているのかも知れない。要介護度が上がる度に、身の不自由さが増す現実には辛い。上句の「ひとつずつ」と結句の「ひとつ上がりぬ」の「ひとつ」が呼応して、その辛さが倍にも感じられる現実。母の身体の不如意は作者自身のようにも重く迫ってくる。

村野次郎への旅（183）

## 昭和期の「香蘭」（十八）

千々と久幸

今月から「香蘭」第五巻第十號（昭和二年  
1927）年十月一日発行號を読むことに  
する。表紙畫裏畫及び題字は森田恒友、編輯  
兼發行人は田中次郎である。総頁数は59頁、  
その後に広告の頁が見開きであり、右側は宇  
野研著歌集『木群』、窪田空穂序文、發行所東  
京市日本橋區紅玉堂書店、左側は秋の大賣り  
出しとして東京駿河町三越呉服の広告が掲載  
されている。三越の広告は珍しいが、どんな  
因縁があつてのことだろう。

それはともかく目次から見えていこう。最初  
は第一同人の短歌で出詠者は十一名、村野次  
郎、酒井廣治、橋本敏夫、池上秋石、本間樂  
寛、南部松若丸、川村浩、芥子澤新之介、石  
野正太郎、今井嘉雄、杉浦翠子、次いで永田  
龍雄のエッセイ「芥川龍之介の短歌」を挟ん  
で第二同人の短歌は九名が出詠、眞島勝郎、  
成田憲三、西村孝、佐藤達夫、住吉良康、日

根まもる、若林昇、庚申薫、芦邨郎。

杉浦翠子のエッセイ「風景歌人」そして神  
無月集に大貫迪子ほか十三名。前月歌壇合評  
は石野正太郎、酒井廣治、村野次郎、橋本政  
一、さらに燈影集（杉浦翠子選）に十八名、  
朝涼集（酒井廣治選）に十七名、十月集（筏  
井嘉一選）に十六名、蟲聲集（村野次郎選）  
に十七名がそれぞれ出詠。

そして東道集に翠子、次郎、廣治、政一、  
旭彦、樂が思い思いに出詠。壺中の天地（小  
エッセイ）に次郎、公一、良康、健吉、編輯  
後記となっている。

例によって村野先生の作品から読もう。

梢の空

村野 次郎

①この町内にいりたるらしき軍隊のそろへる  
靴音高まり來る

②とどろきて砲車すぎたり兵隊のにはひはの  
こるこの暗闇に

③樺の葉のゆらぎ明るき朝町をかくく歩み來  
女異人ふたり（輕井澤にて二首）

④夕ぐれて町に下り來し山霧の灯なかに見え  
てうごく人かけ

⑤朝戸出に仰ぎて出づる庭の木の梢の空も秋  
めきにけり

⑥他氣なきことと思へどなまけりて昨日も  
今日も氣にかけて居り

①、②の歌、ネットで検索すると明治憲法  
下における日本国の国是の一つであった富国  
強兵の根幹を支える兵役法は、昭和2年4月  
1日に公布され、12月1日には実施されてい  
る。この後、軍隊は膨張し十年後の日中戦争  
にまで発展するのだが、それは措く。

先生には「軍隊」あるいは「砲車」（火砲の  
運搬に便利なように砲架に車輪を取り付けた  
もの。また砲架は砲身をのせる台、広辞苑）  
はどのように映つたのだろう。

敏感な一般市民ならこのような時代の空氣  
に、何かききな臭い匂さを感じ取っていたので  
はあるまいか。

③、④の歌、さりながら一般市民はまだ軽井澤に遊ぶ余裕があったのだ。

⑤の歌、「朝戸出」は手元の古語辞典(旺文社)には「朝、戸を開けて出て行くこと」と素っ気ないが、広辞苑にはその後に「多く、一夜明けて女のもとを去ることにいう」として万葉集の歌が紹介されている。辞典にもかかわらずの如く視点の違いが見て取れる。

⑤の歌は、真つ当なりリズムであり、叙景歌以上の意味は感じ取れない。

⑥の歌、概括的な意味は取れるが「氣にかけて居」る具体が見えない。舌足らずと言うべきだろう。

この頃の「香蘭」ではもつとも活気のある前月歌壇合評を読もう。評者は石野正太郎、酒井廣治、村野次郎、橋本政一である。

霸王樹

橋田 東聲

紅丸にて別府に向ふ

おのづから胸うちひらく海の上まだあけきらぬ空のいろ紅し

子供らはみは海にゆきて晝深し隣の室に基石うつ音(花菱旅館)

(廣治)(二)の歌、上句の調子の張つたのに對して下句の「空のいろ紅し」字餘りが餘り

に重々しく感じられて氣分が乗らない。それに五句の表現も未だ生のやうに思はれる。

(二)の歌、平明、「晝深し」と「碁石うつ音」とに依つて相當靜寂感は表れてゐるけれど多少しく定まつた型でなからうと思ふ。

(正太郎)(一)上句と下句が同じ様な力(但し弱い力です)でのつぺらぼうではないでせうか、結句にとつかりと重みが欲しいとおもひますが。

(二)表現にも情景にも板につきすぎて余有的あいある足らなさがありますが悪くはないと思ひます(但し大家の歌がこの程度のままでは救はれません)

光

金子 薫園

くもり日の森見てをれば飛行機のつらなり  
來り過ぎゆきにけり(井の頭公園にて「光」小集の日)

朝ぎりの中にしづもるうす紅の夾竹桃の見たくよろしき(家族らと鎌倉長谷に避暑す)

(政一)金子薫園氏の歌は久しく見ないけれど近頃の此の作を拝見すると同氏は相變らず昔のやうに平坦な道を歩み續けてゐられるやうに思はれて全く十年一日の如しと云ふ感がある。一旦入つた殻は誰でも容易に抜け出られ

ないものと見える。永らく作歌に携わつてゐる同氏の歌として喰ひ足りないことも甚だししい。一の歌全体が恐ろしく微温的である。たゞ見たゞけを云つてのけたと云ふ感じが起るのみで調子に張つたところもなく、反撥的に迫つてくる感動の鋭い閃きも見出せない。もつと心持のしつくり合つた周囲の雰圍氣を出すべきでなかつたかと思ふ。

二の歌は一に比べると幾分無難であるが第五句が安易に片付けられてゐるため餘情が出ない。今少し繊細な感じを出して貰ひたかつた。

(政二)僧越な言分ではあるが、これは二首共今少し苦勞して頂きたい歌である。ある時代にはこの程度の歌でよかつたかも知れぬが今の吾々には、かなりもの足りなさを感じる歌である。

(一)の如きをなんでもない歌といふのであらう。(二)の歌にしても、夾竹桃の花を、朝ぎりの中、しづもる、うす紅と並べて、説明してゐられるので上句がだらだと冗漫であるのに下句も見らくよろしき、と一寸嬌態を見せて流してゐられるので遂にこの一首もお調子のみのものに終わつてゐる憾みがある。

負の能力 (二)

わたしたちには知らないことは知ろうとする本能があるらしい。好奇心とか関心の深さと言い変えてもいいが、「知る」ことへのこだわりは一方では無い。

たとえば道路の真ん中にある日突然ぼっかり穴が開いたりすると、つい覗き込みたくなる。あるいは誰かが立ち止まって空を見上げていれば「何があるのだろう」と自分も立ち止まって見上げねば気がすまない。事程左様に周辺の出来事を知らない（知ろうとしない）自分が許せないのだ。ではなぜそうなるのかと問われれば答えに窮するから、それは本能だからと自分を納得させるしかない。

このような事態に直面すると今度は、ならば「そんなことに何の意味があるのか」と問わずにはおられない。意味の無いことを（知らない自分が）許せないのだ。昔のショート・ショートにこんな話があった。さる名医が患者を診察して、これまでの自分の医学知識では病名のつけようのない患者に出会った。そこで困り果てた名医は思わず「この病気はオレ（医者）を冒瀆している！」と叫んでしまった、というのだ。

つまり、近代人は「解らないこと」は「恥すべき」ことであり、「意味のないこと」には価値がないから「許せない」となる。先にわ

たしはそれを「本能」と書いたが、いっそ「現代病」と言った方が解り易いかも知れない。

——とここまで書いてきて「ええつ、これってオレのことではないか」と顔を背けたくなった。行け行けどんどの高度成長時代（1950年以降）に青春期を送った人間には、この時代に身に付いた合理的な精神や効率主義が未だに抜けない。むしろ性格や環境も太きに関係していようが、今はそう自認せざるを得ない。あれほどの野球少年だったわたしが野球の試合時間の長さにはイライラし、ある時期からラグビーファンに宗旨替え（？）したのだ。

幸い今は老いと真向かうことになったから青春期、壮年期ほどの過剰さはなくなったが、それでも未だに尻尾は変わってはいまい、という程度の自覚はある。

先月号に書いた「運・鈍・根」の延長で言えば、「沈黙は金、雄弁は銀」も半信半疑である。広辞苑によればこのフレーズは「西洋の諺から」という頭注がある。わたしの理解では「東洋の諺」そのものに思えてならないのだが、それは措く。

自らのことをつい長々と喋ってしまったが、念頭にあるのは帯木蓬生の説くネガティブ・ケイパビリティ (Negative capability) という概念についてである。この論はシェイクスピア、キーツ、紫式部にまで遡って展開されるが、わたしはそこまではフォロー出来ていない。わたしの過剰反応がどこまで著者の真意と重なるか、今のところ自信はない。わたしは自分の領域で現代人のアイデンティティーの模索を始めたばかりだ。この論が精神医療に至りつくまでにはまだまだ長い道程を辿らねばならぬ。

# 一頁公論

(50)

## もう一度訪ねたい場所

—上高地とマイカー規制—

藤田 祐恵

私のもう一度訪ねたい場所は、「上高地」です。昨年六月初旬に人生初めて上高地に旅行し、全てに魅せられてしまいました。美しいなんてもんじゃありません。形容詞がみつかりません。梓川の澄んだ透明の流れ、四季折々の高山植物が豊富な湿原、周囲に見える映画のワンシーンのような穂高連峰の山々。どこを歩いて、どこを眺めても、美しい自然の連続です。さらに上高地のシンボルの河童橋からの眺めの素晴らしいこと。

河童橋は梓川に架かる木製の吊り橋です。この橋からは穂高連峰や岳沢、焼岳などの絶景が望めるため、上高地を訪れる観光客にとって必見のスポットとなっています。私たちも、ご多分に洩れず、たくさんの写真や動画を撮

りました。

橋の名前の由来には諸説あり、その昔、河童が住みそうな深い淵があった、衣類を頭に掛けて川を渡る人々の姿が河童に似ていた、などがあるようです。そして芥川龍之介の小説「河童」に登場する橋として、その名が知れわたるようになりました。

マイカー規制により、自家用車の走らない道路。自動販売機など余分なものの無い道。鳥のさえずり、木々のざわめき、風のそよぐ触感。水の流れる音。澄んだ空気。五感がフル回転です。いつまでも眺めていたくなる景色が続くのです。

今回は大正池から明神橋まで歩きました。遊歩道が整備されているおかげで、快適に歩けます。それでもあちこちに、熊注意の看板があり、熊鈴をリンリン鳴らしながら歩きました。肺が生き生きするような空気を胸いっぱい吸いながら。記憶に残したい景色を、スマホで動画も含め撮りまくりながら。今度訪れる時は、しっかりとしたハイキングシューズを履いてこよう。明神池の先へ進みたくな

上高地は年間を通じてマイカー規制が実施されています。それは自然環境の保全と渋滞の緩和を目的として実施されています。一九七五年から始まり、一九九六年に現在の年間を通じてのマイカー規制になったとのことです。上高地への路線バスは低公害バスを使用しており、上高地の環境保全と地球の温暖化防止にも貢献しているそうです。

私たちも、まず電車で松本に、そしてアルピコ交通の上高地線で、なんとも声に出すとかわいい駅名の「しんしましま」新島々へ。そこからバスに乗り換えて上高地に入りました。時間はかかりましたが、上高地に近づくとつれワクワクしました。

このマイカー規制により、美しい自然が保たれており、今後も多くの人々に愛され、感動を与え続けるでしょう。

その美しい自然が人々の心をふるわせるのです。心がふるえる。それは歌の種です。マイカー規制は、歌の種が生まれるのに一役かっているのです。